

## 第2回 美しい九州づくり懇談会 議事概要

1. 日 時：平成 17 年 3 月 24 日 10:00~12:00
2. 場 所：博多都ホテル 孔雀の間
3. 出席者：委 員：島谷座長、伊東委員、深堀委員、宮本委員、米田委員  
(欠席：包清委員、松岡委員)  
整備局：岡山局長、田中企画部長

### 4. 内容

- 1) 座長あいさつ
- 2) 意見交換
  - ・九州における景観に関する課題について
  - ・懇談会の提言イメージについて

### 5. 議事概要

#### 1) 議事概要

景観の課題について(各委員からの提案を踏まえ)

- ・ イギリスの郊外の街(ここでは ambleside の写真を示す)での 200 年、300 年続く建物は、スレートやライムストーンといった地域の素材を使うことで、地域の色が色濃くでている。どの町もその町らしさが入った瞬間にわかる。このような地域らしさをヴァナキュラーというタームで表現することは多い。このタームをキーワードとすることは、意味があるように思える。また、キーストーンは、生態学の用語である。必ずしも見えないが、この種がなくなると生態系が崩れてしまうと思われるもので、文化とか景観の中にもあるはず。それを発掘することは意味があるのではないかと思われる。また、ランドスケープキャラクターティックアセスメントは、地域らしさについてのアセスメントで、地域らしさを壊しているかの判断などには有効ではないか。デザインコードは町の色を決まりであったり、素材や屋根の色とか高さとかの基準であったりするもので、例えば東京都国立市では市民の間で合意が図られている。
- ・ 自然に着目すれば、九州らしさの合意点が見つかると思え、緑に着目した。北海道、関東に比べ、九州には違う樹木があると思う。効き目のある施策対象として緑を考えることは有効であると思う。全国に比較して先導的な緑の取り組みを九州流として打ち出せば良いのではないか。また、これまでの区画整理事業や大規模再開発と言ったクリアランス型の開発は限界で、景観的にも良いまちなみができないという考えも出てきている。これからのまちづくりは改善型に重点を置きながら進めて行ったほうが良いのではないか。その道具としても緑は使えるのではないか。景観教育では、まちなみ探検的な授業として地元の小学校 5,6 年生と、地元外の専門の大学生とのまちなみ探検を提案したい。学生や小学生の環境教育面の効果以外に、地元外の眼でも見てもらうことで、地域にとっても発見、気づきがあるという効果もある。
- ・ 毎年、伝建地区は全国で 4 件程度選ばれているが、そのなかで九州は半分か、三分の一程度を占めている。また、国見町の神代小路のように、平成 10 年の文化庁の調査では見られなかったものもあり、発掘していくと歴史資源はたくさんある。また、歴史を活かしたまちづくりは有効であることがわかってきたが、ただ、その進め方については随分失敗がある。日田市豆田地区の例についても 20 年程前から市が独自に景観整備を進めてきたが、曖昧なデザインコードを用いて歴史的であれば何でも良いとしてきたため、豆田らしい景観が破壊さ

れてきた。これに気付いて、もう一度オーセンティックな景観に着目することで再出発し良い景観ができた。オーセンティックとは、にせものに対しての本物と言う意味で、景観の価値づけには非常に重要なキーワードになる。また、八女市の例でも同様であるが、いきなり計画をたてるのでなく調査段階から入っていくことが重要である。

- ・ロードサイドの問題は、車社会や我々の買い物をする行動とか、車社会との向き合い方とか根の深いものから発生した結果であるため手をつけるのが大変であるが、非常に気になっている。また、中山間地域の景観コントロールに関して、コンクリート擁壁、ブロック石積の立体的な構造物が田舎の景観を壊している。素材の選び方を間違えると、景観を破壊してしまうことがある。また、風景と景観の使い分けをどこかで議論すべきと思う。
- ・空間配置も問題。出雲大社では、駐車場の配置が門前町（町並み）を壊した。簡単に破壊されてしまう。道路や河川の線形計画のときにも、効率性が優先され、景観の観点からみた配置については抜けている。郊外に効率性だけで道を作ると風景が壊されてくる。駐車場の配置も含めて、動線配置は景観にとって重要である。また、全体的にエコロジーの観点が薄いのではないか。海岸線の問題は出ていたが、海、有明海を含めた大きなランドスケープをとらえ、それらは、河川管理、土砂の管理、水質など広域的な行政管理のなかで、国土交通省としてリーダーシップがとることではじめて風景が維持で出来るのではないか。大きな風景を形成する視点を入れておく必要がある。また、土木遺産の発掘と活用として、それぞれの地域のなかで、自分達もっている土木遺産を評価していく視点も重要ではないか。また、農業とのかかわりも必要ではないか。農村風景を維持する河川や道路のあり方なども関連が深い。
- ・地域らしさとしてのヴァナキュラーには、建築のタームとしてだけではなく、本来、植物の地方名など生態学的な意味があり、九州の景観づくりや環境づくりのキーワードとて提案したい。
- ・農村地帯の農をいかに保全するかと言う問題も大切だが、市街地の緑化を進めていく観点からみても、市民農園のほか、人口減少時代にあっては、市街地の中の農地も逆に再評価する時期にきている。市街地のなかでの農の復興の視点もあって良いのではないか。また、駐車場の位置、配置の問題は、交通システムの問題としてとらえたらどうか。
- ・どういう視点で景観をとらえるのかを考える必要がある。これまでの議論は、ひとまとまりのスケールとして、全体的に街区規模の見方が全面にでており、それ以外でも九州全体をととか、山から見下ろすとか大きなスケールや、海から見た風景などその中間スケールもある。取り扱う大きさによって、どういうプロジェクトの立て方が良いのか、スケールによって切り口が異なるのではないか。駐車場や文化財など切り口対応での議論もある。整理が必要である。
- ・現状の認識・課題はかなり出てきた。概ねこれを基に進めていけば良いと思う。空間的スケールの問題はどこかで議論が必要であるが、最後のまとめの議論になっていくのではないか。

#### 提言のイメージについて

- ・「計画段階の前での調査」の重要性を仕組みづくりのなかで是非取り入れて欲しい。計画づくりの前に、地域のデザインソースを見つけるためにも、今ある資料だけでなく、資源の発掘の調査が必要ではないか。また、オーセンティシティーは、本物があることや、地域が作り出した本物から学ぶことが大切である。オーセンティシティーというキーワードを入れておくことが重要である。地域独自のデザインという言い方も、オーセンティックなデザイン、意匠という言葉が良いのではないか。また、素材も組み合わせ方も大事である。
- ・ビオトープが流行だが、にせものの自然も多くなっており、自然についても本物性を判断できるしくみが必要である。地域らしさの中に、自然もいれていく必要がある。

- ・長崎港周辺のデザインコントロールの方法は、デザインマニュアルを全く用いずに、専門家の委員会であたきあうという形をとっている。デザインマニュアルは、悪い物を防ぐ効果はあっても良いものを創ることに繋がらないとの専門家の指摘を受けている。提言の内容を詰めていく前に、景観の専門の先生で行政に入っていきながら悪戦苦闘されている方々にインタビューすることも考えたらどうか。仮に作るのであれば、公共事業の担当者に対しては、細かいデザインの事ではなく、「勘所」となる視点を示したものが有効ではないか。こういう橋のデザインは、橋でなく橋詰が重要とか、景観の検討は往々にして基本設計の段階では遅く、プランニングの段階で入るべきとかである。
- ・風景立国九州というタイトルは面白い。人がどこまで風景を創れるのか、長い歴史と自然のなかで出来ていくものと区別すべきではないか。改善していく道術を示していくとか。また、引き算をして良くなる景観も多い。守るだけでなく都市部ではチャレンジャー的なところもうまくコントロールできれば、かなりおもしろい地域性がでるのではないか。
- ・1章と2章の間に、風景づくりの考え方を入れる必要があるのではないか。その中で、「調査の必要性」「勘所」などを書いていく。また、1章に九州の風景の写真をいれたらどうか、付録でも良いが、各事務所で著作権のある良い写真をもっているのではないか。
- ・市民から集めるアイデアもある。年代、職種等いろいろ違うものがあると良い。
- ・デザインコードは土地によって作り方が違ってくる。きめ細かなデザインコードが作れるところと作れないところもある。人の声でなく、土地がどう望んでいるか土地の声を聞き取ることから始まる。調査が重要であること理由でもある。
- ・デザインコードも作った方が良い場合と悪い場合がある。質の高いものを目指す場合はかえってじゃまになる。考え方をきちんと書き込んでいく必要がある。武雄河川事務所では、河川の水門、樋門についてはデザインコードをもっている。デザインコードを持っている事務所にも有効かどうか検証したらどうか。
- ・デザインコードも場所によって変わってくる。建築単体等、高度なデザインを要求される空間では難しいかもしれないが、スケールの大きい空間では可能ではないか。
- ・NPOとの連携と景観阻害要因に対する改善の推進をうまくリンクづけするような施策があれば良いと思う。また、市民運動として、とりあえずはこれだけはどうしても改善していこうという、身近に市民ができるような運動に結びつくような材料があると良い。在来種緑化とうまく結び付けていくなど考えられないか。長崎道の100キロポスト付近での法面緑化など、在来種でうまくいっている。たとえば、目立っている構造物のコンクリートの壁面を、近くの神社の境内の樹の種を取ってきて、小学生でも参加できる在来種での緑化の運動など、市民の運動として景観づくりと結び付けていくことが重要である。
- ・外来種での法面緑化は、緑化に使用された外来種が河川等に入り込んで、生態系を破壊しているケースが問題となっている。このような問題を検討することも重要である。
- ・次回は、良い事例、住民参加の事例などを集め、良いものがリードするような事例を集めて下さい。
- ・事例で橋梁のように目立ってしまう構造物が足りないのでは、高千穂の橋梁などは良い評価を頂いている。河川はどちらかというと目立たない方が良いが、橋は地域、地域によって、目立たない方が良い場合や目立った方が良い場合といろいろある。否が応でも目立ってしまう橋梁は真正面から取り上げたらどうか。また、高規格道路の整備が進む中で、切土の切り方の工夫、風景に馴染んだ切土面をどうするかなども重要である。高知県の道路では、ポット苗を小学生がドングリ拾いで植え、地元の森林組合と一緒に苗を育て、のり面に植える取り組みを10年以上やっている。すばらしいものができており、非常に良い仕組みではないか。仕組みとして、専門家が事務所ごとに入って頂くことは継続性もあり専門性からも大事であるが、それを支える地元の団体づくりも大事である。点検、問題を掘り起こしてくれるグループ、行動グループ及び専門家をセットで事務所の常備品にしておくことが良い。景観

の先生も、無機質な景観の先生と、植生、自然の先生とがあり、地元の市民の声、目、行動がセットであると良い。こうしようという提案もあっても良いのではないか。勘所集、べからず集、コード等は今回作って入れておいたらどうか。あるべき論だけでなく、これ自身を常に持っておきたいようなものにしたい。基本的なところがあるのではないか。ほんの1ページでも九州コードというようなものが出ればよい。

- ・それが2章の考え方ではないか。また、今回九州地方整備局内部での課題も出してもらいたい。
- ・この辺が解決できたら良いというプラスの課題を出して欲しい。
- ・良い景観をどう守るか。どう活かすかの項目だても必要ではないか。
- ・農の取り扱いも触れていくべき、特にフリンジ（農地と隣地の境界など）のところの問題である。
- ・将来の九州の景観・環境づくりを考えるのであれば、教育の視点は重要であり、小学校、中学校向けのやさしい景観教育や生態系教育のサブ教材作りに繋がるような検討も必要である。

以上